



Title	建築家小川安一郎について
Author(s)	山形, 政昭
Citation	デザイン理論. 1994, 33, p. 43-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

建築家小川安一郎について

山形政昭

大阪芸術大学

キーワード

小川安一郎, 住友營繕, スパニッシュ

Yasuichiro Ogawa, Building Department of Sumitomo, Spanish

はじめに

卒業まで 雜木の家

住友營繕時代 奇想の館

内外木材工芸社時代 特命工事

公務を離れて 美術工芸的住宅

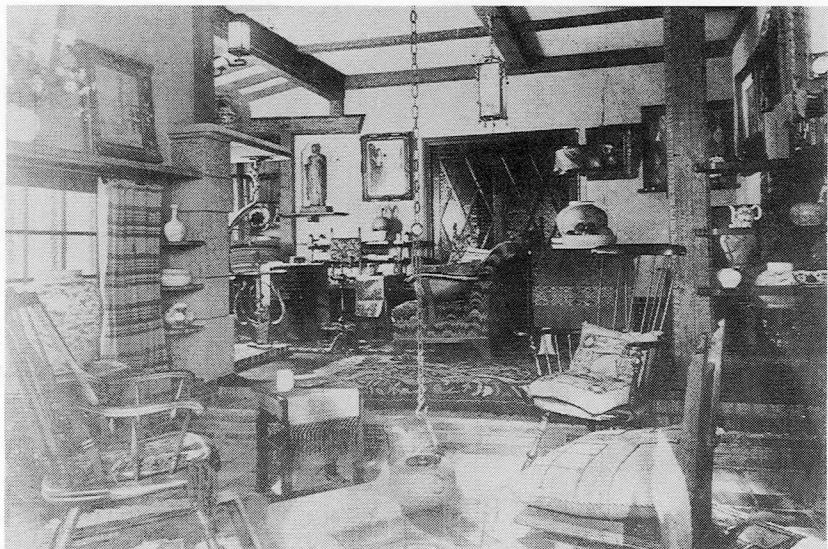
川田順郎と木水栄太郎邸 おわりに

はじめに

昭和8年（1933），建築家小川安一郎は50歳にして自邸の建築のため豊中市上野に土地を得て住宅を建てている。箕面の山裾に位置する豊能郡桜井谷村の小さな丘の一角にあり，付近には溜池，天然の梅林，竹林，山桜が繁茂する原野の景を残したところであった。

「我が住む家」^[1]と題して発表されたなかに居間（応接室兼書斎）の一角を伝える写真があり，「家具は内外木材會社製，敷物はトルコ古物，ストーブはウンケル型和製，額はオランダ製マジョリカタイル，手前の壺は龍頭口唐三彩」と説明されている。このように欧州各地で入手した美術品に加えて，手前の一段低いサンルームには囲炉裏風の炉があり茶釜が懸っている。室内意匠の構成は荒い木肌の木組みを造形的に活かし民家風の趣を表わす一方，創意ある石積みの暖炉や囲炉裏風の炉，カラフルな床タイルなど多彩な建築表現を組み入れたもので，なかに夥しい美術装飾品や家具が配されているものである。この写真から窺えるように，この住宅は真に趣味溢れるものであり，設計者の美意識，建築觀が奔放に表れているものと思う。小川安一郎は明治40年（1907）に住友本店臨時建築部に入って以来，住友營繕の建築技師を務め，上司であった日高胖に認められ住友銀行東京支店（大正9年），住友ビル（昭和5年）など大正，昭和初期の主なる建築設計に活躍した建築家であった。

ところで小川については住友營繕の組織と建築家をこれまで広く解明された坂本勝比古博士



小川邸居間兼応接室 昭和8年

の研究があり、「住友の建築家たち」²⁾のなかで、野口孫市、日高胖、長谷部銳吉、竹腰健造について小川安一郎がとりあげられている。そこでは氏の経歴の概要を明らかにされ、また室内装飾の分野に目覚しい活躍をした小川の個性的な技量について指摘されるなど住友營繕における建築を中心に紹介されているが、未だ小川の全貌を明らかにされるには至っていない。そこで本稿では、小川が住友營繕技師という公務の傍らで行なっていた、謂ばサイドワークとしての設計活動を跡づけて建築家小川の住宅作品の特色と建築観を明らかにしようとするものである。

ところで自邸を建てた時期には住友を辞し、小川は第二の職場となった内外木材工芸社に転じ、その技師長を務めていた。内外木材工芸社は大林組工作所より発展した木工造作を業務とする会社で、設立当初より取締役幹部の一人に大林組住宅部長であった松本儀八が就いていた。松本は小川と同郷の佐賀出身であり、県立佐賀工業学校から京都高等工芸学校図案科と両者は同窓の交流を保っていたのであり、小川の転職には松本との関係があったと思われる。そこで住友以降の建築活動を考える上においても、小川の経歴から追ってみたい。

卒業まで

小川の経歴は履歴書³⁾などの記録より、凡そが知られる。

安一郎は明治15年（1882）佐賀県南部の村にて中山平七の三男安一⁴⁾として生まれ、中山家と親戚の関係にあった小川家養子となっている。その後、県立佐賀工業学校の木工科を経て京都高等工芸学校図案科に学び、明治40年（1907）に第3期生として卒業している。小川の後半

期の活動を追うと、この京都高等工芸学校で受けたであろう学業と、そこから卒立った同期生及び一年後年の同窓生の動きに注目すべきものがある。

周知のように京都高等工芸学校图案科は、明治35年（1902）設立され、欧州の图案学研究成果をもってその翌年7月に帰国した武田五一を科長として、近代デザイン教育を行った特色あるところで、武田を補佐して洋画家浅井忠が教員として活躍していたことも知られている。武田によるデザイン教育の特色は、当時欧州の折衷主義建築を彩っていた種々の建築様式から、先の欧洲視察で目にしたアールヌーヴォー、さらには英国のマッキントッシュのデザインの紹介にまで及んでいたといわれ、当時我国において先取的な图案科教育がおこなわれていたところにある。こうした気風を反影して、小川の卒業制作は「邸宅応接用堅台ピアノ並ニベンチ図案」でアールヌーヴォーの色濃い作品であった。その同期の卒業生18名のなかに、後年、建築界において関わりを深めることになる数名の同窓生がいた。小川と同じ住友建築部入りした三木辰三郎、平尾善治、大阪市土木部公園課に勤め課長になる椎原兵市、宮内省入りした吉武東里、宮内省に入り後に高島屋設計部に移った永山美樹らである。さらに翌年卒業し、やがて大林組住宅部入りする松本儀八がいる。松本は先述したように佐賀出身の小川と同郷人であり、佐賀工業学校木工科を経て、明治37年（1904）京都高等工芸学校图案科に進んだ友であった。

住友営繕時代

明治40年（1907）、京都高等工芸学校を卒業後、直ちに住友本店臨時建築部入りして以来、機構の改変により住友総本店営繕課、住友合資会社工作部と組織名称は変るが、昭和6年（1931）に退職するまで24年間の所謂住友営繕時代を歩んでいる。住友営繕にはこの時代を通して百名に近い技師を擁し、我国屈指の建築設計組織を成していたが、明治30年代に入社した創立期以来の主要技師達に次いで、小川は明治40年代入所の第二期世代の主要技師として活躍している。実際大正2年（1913）より4年間に亘る東京勤務は住友営繕としては当時最大の建築工事だった住友銀行東京支店の設計担当者としての仕事であり、帰阪後に着手される住友ビルの設計にも参画している。さらに建築意匠の手腕が認められ、住友茶臼山本邸洋館（大正9年）、住友京都鹿ヶ谷別邸（大正中期）、住友俱楽部（大阪、昭和3年）、住友銀行船場支店（昭和5年）などの主なる建築の設計をつづいて担当している。

こうした一連の設計業務において、小川安一郎の業績として世に出る作品は希であり、技師長の任にあった日高胖、あるいは卓抜なる技量と手腕で住友営繕の建築を導いていった長谷部銳吉、竹腰健造の狭間にあり技師として際立つことの少ない役割を果していたようである。

住友ビルの新築工事をほぼ終えた昭和4年（1929）、その功績によって欧州建築の出張視察の旅に派遣されている。欧米のあらゆる建築に対しての関心は深く、日常の勤務の傍ら多くの

建築書を丸善より私的に購入し学んできた小川、47歳にして始めての洋行であった。

「新興建築工事設備工事家具装飾工事取調べノ為」の視察旅行は昭和4年9月より翌年5月までの8ヶ月に亘り、シベリヤ鉄道を経由して入ったモスクワを振り出しに、ワルシャワ、ベルリン、ストックホルム、シュトッドガルト、ブリュセル、パリ、ロンドン、スペインの各地、ウィーン、ブダペスト、プラハ、イタリア各都市を巡り、ナポリより鹿島丸にて帰国の途についた。その旅の成果は「歐洲最近の住宅と家具装飾品に就いて」⁵⁾のレポートにかなり詳しく報じられたが、最も興味をもったと思われるスペインの旅については、「別の機会に述べたひと思ひます」と記すのみで、詳しい旅程は明らかでないが、その小川の筆の重さに格別の印象をもったことが推察される。ともかく旅の途上で入手され、持ち帰った建築書の多くはスペニッシュに関わるものであった。

経済不況が深刻化する昭和6年、住友工作部も組織の縮小が迫られるなか定年を迎えた日高胖はその後を長谷部銳吉に託して去り、間もなく小川安一郎、平尾善治、多久仁輔らの技師数名が依頼退職する。そのなかで小川は永年の功労により住友合資会社の属託に遇され、また住友家末家に編入されて生涯住友社員の一員としての誇りを逸することはなかった。

内外木材工芸社時代

住友を去った小川は、昭和6年(1931)11月付けで内外木材工芸社株式会社、技師長として迎えられている。同社は大林組において明治38年に設けられていた工作部を源として、その製材及び木工部門を分離独立させ昭和6年10月に設立されたもので、取締役には当時大林組住宅部長の松本儀八、設計部の石田信夫らが就いており、技師長小川の招致に際しては昵懇であった松本の働きがあったと思われる。その業務は製材、合板製造、そして建築、船舶の木工造作並びに建具、家具の製造であり、この分野では我国有数の会社として注目されたものだった。小川は翌昭和7(1932)年に設計部長、昭和11年に取締役に就き、昭和12年に55歳の定年退職を迎えるまで活躍した。この新しい職場で小川は持前の意匠家としての技量、造作工事の指導に尽力し、当時大林組による朝香宮邸(東京・昭和8年)、新大阪ホテル(昭和9年)、大阪株式取引所(昭和10年)、乾邸(神戸・昭和11年)などの建築、内装工事に関係したとみられる。こうした業務の経験をふまえ、「木材造作工事の施工に就いて」⁶⁾と題する木材造作概論をまとめている。それは「第一節 図面の成作及模型」より始まり、材料の検査、造作取付け工事、



2 住友俱楽部 昭和3年

建具、など14節に及び記述されたもので、当時の造作工事の概要と状況を伝える資料と目されるものである。

内外木材工芸社の設計部には小川と並ぶ幹部技師に高野瀬藤太の存在が知られ、その力量は斯界において際立ったものがあったといわれている一方、小川は業務を通して高島屋に転じた永山美樹、その配下にあった鈴木総作らと交流のあったことも伝えられ⁷⁾、こうした活動を展開するなかで自邸を含め、住宅設計に勤しんだのである。

公務を離れて

昭和12年（1937）に内外木材工芸社を辞してのち、昭和19年まで大林組の常勤嘱託を勤め、さらにその後、社団法人日本建設材料協会関西支部常任参事に就いているが、戦時体制が強まるなかでこうした晩年の公務において伝えられることは少い。

小川安一郎 年譜

1882(明治15). 6. 6.	佐賀県杵島郡須古村の中山平七の三男として安一生まれ、須古村字堤の小川家の養子となる
1899(明治32). 4.	県立佐賀工業学校（佐賀市水ヶ江）木工科に入学
1902(明治35). 3.	県立佐賀工業学校卒業、研究科生となる
1903(明治36). 8.	県立佐賀工業学校嘱託教員となる（～明治37. 9. 5）
1904(明治37). 9. 10.	京都高等工芸学校图案科に入学
1907(明治40). 7. 3.	京都高等工芸学校图案科を卒業
31.	住友本店臨時建築部に勤務する 大阪、北桃谷の借家に住まう この頃より小川安一郎をなる
1909(明治42). 4. 15.	橋本発太郎の四女、橋本すえと結婚する
1911(明治44). 10. 31.	住友総本店営繕課建築係
1913(大正2). 6.	東京転勤（住友銀行東京支店新築工事の設計担当） 東京都小石川区坂下町47に住まう
1917(大正6). 9.	大阪本店に戻る 天王寺区松ヶ鼻町78に住まう
1921(大正10). 5. 19.	住友合資会社工作部建築課
1929(昭和4). 9. 26.	歐州建築、家具装飾など視察のため出張旅行（～昭和5. 3. 24.）
1930(昭和5). 1.	住友合資会社技師となる
1931(昭和6). 10. 10.	依頼退職す。永年の勤続により住友家末家に加えられる 11. 内外木材工芸株式会社に勤務、技師長に着任
1932(昭和7). 6.	内外木材工芸株式会社取締役設計部長、営業部長となる
1933(昭和8).	自邸（長山居）を建てる 豊能郡桜井谷村字内田767（豊中市上野西）
1937(昭和12). 6.	内外木材工芸株式会社を定年により退職す
1937(昭和12). 6.	大林組常勤嘱託となる
1944(昭和19). 4. 25.	大林組を依頼退職
1944(昭和19). 5.	社団法人日本建設材料協会関西支部常任参事に就く
1946(昭和21).	豊中の自宅にて脳溢血により他界す（享年64歳）

しかしそれを補って、小川には独自の創作力を発揮した私的な建築設計の仕事があった。それは大正初期、つまり住友営繕時代に遡って始められ、その施主の多くは住友の幹部に属する名士が多く、それらは職場組織を通して与えられた私的業務であったと思われる。小川の履歴書においても「個人トシテ設計監督セシ重ナル工事」として49件が記されているが、その主要な作品21件を後に表記した。これらのなかで初期における川田順邸、今村幸男邸ら住友の重鎮であった施主の仕事は工作部の日高胖を経て小川に託されたもので、当時において住宅設計者として認められた存在であったと推察される。一方、十合百貨店の経営者、木水栄太郎の住宅、濱地藤太の大坂扁桃腺病院は、私的な依頼に応じた実質的な個人的作品であり、こうした設計活動による業績を合せみることにより建築家小川安一郎の個性をより鮮明に理解することができよう。

この個人的な建築設計は専ら私宅で行なわれていたと想像され、その状況を伝える記録は少なく、僅かに縁者の記憶に留められているものであるが、その一端を大正2年春、当時天王寺区桃谷に住まう小川を訪れた藤木正一はその様子を次のように記している。

「当時、通された小川氏宅の2階では、4～5人の人たちが設計図を引いていた。それはあとでわかったことだが大阪の繁華街心斎橋筋に面した木造2階建ての「大丸」の図面であった。同店と関係があって設計を頼まれていた松永辰次郎氏の依頼で小川氏らが図面を引いたり、積算しているところであった。」⁸⁾

小川は東京出張を真近かにした大正2年春、未だ個人的に依頼された住宅設計ではなかったが、そのスタッフの多くは住友の若手技師達であり、本務を離れた時間に小川宅に詰めかけていたと思われる。こうした建築助手の一人に坂本仙吉がいた。坂本は大正9年に松山市立工業徒弟学校を卒業した折、麦田口校長の紹介により小川に師事するようになる。そして一時期大林組に勤務するが、大正14年より小川宅に住み込み助手を務めたという。坂本は昭和8年以降藤木工務店に務め、やがて独立するが、小川の設計に関係する仕事に長く従事したという。

川田順邸と木水栄太郎邸

両邸は当時関西圏における住宅を積極的に取材して報じていた日本建築協会の会誌『建築と社会』誌上⁹⁾に掲載されたもので、小川の初期作品を代表する2例と見なせるものである。この二つの住宅は様式意匠的には各々和風及び洋風による対照的な作例と見られるものである一方、共通して小川の住宅作品によく活用される手法がみられ、また住宅としての総合的な質の高さに小川の力量が窺えるものである。

川田順は当時住友製鋼所を代表した住友の重鎮であるとともに歌人、数寄者としても知られた名士であり、住宅には近代的な設備とともに和風による趣味深い住宅を求める要望があった

のであろう。本邸は日本瓦葺、真壁工法により純和風と見られる瀟洒な外観をもつ邸宅として計画され、内部も椅子式を導入しつつ和風感覚に溢れたものとなった。その和風の表現は所謂日本趣味に止ったものでなく、「単純なデザインだが、そこに日本的な簡雅さを充分に偲ばせる」造形的な特質を有したもので、洋風の手法が応用されたところに特色があった。その個性は居間兼書斎兼応接室の意匠に顕著に見られるように椅子を用い暖炉を備えた広間につづけて南にサンルームを配する洋風居室の構成をとるが、意匠的な要所に化粧柱や和風の木格子、暖炉の向かいには床の間を配し、天井の網代、ナグリ仕上げの腰板など和風を強くした空間であり、それは家具、照明器具の意匠にも著しいものがある。しかしながらこの和洋の折衷には明治、大正初期に多い形式的な和洋折衷様式には無いモダンな感覚が息づいているのであり、高雅な日本趣味を洋風の手法のなかに表現したもので、特色ある家具デザインにはあえて言えばE. W. ゴッドウィンら英國のモダンデザインの影響を感じさせるものがある。

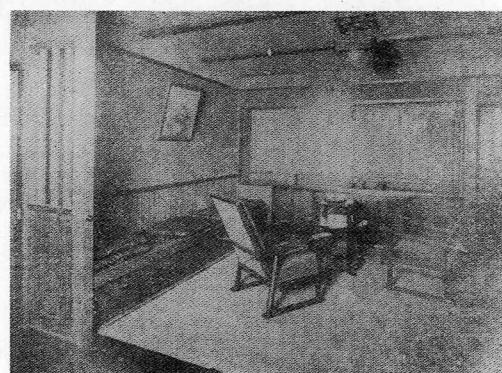
一方、木水邸の設計は、「友人木水君の住宅設計に就いて」にも記されるように、小川の親しい友人であった施主から「万事を一任する」全面的な依頼に応じて設計されたもので、小川の創意のままに生み出されたものだった。

坪35坪、2階20坪程の中規模のコテージ風住宅で、外観にはマッキントッシュによるヒルハウス（1902）の影響を強く滲ませたもので、コンパクトかつ巧妙に計画されたインテリアには要所に設計者小川の卓抜な空間デザインが組み入れられ、加えて石とタイルによる暖炉、ステンドガラス、個性的なデザインの家具が配され、総じて美術工芸的な質と空間をもつ住宅作品であった。

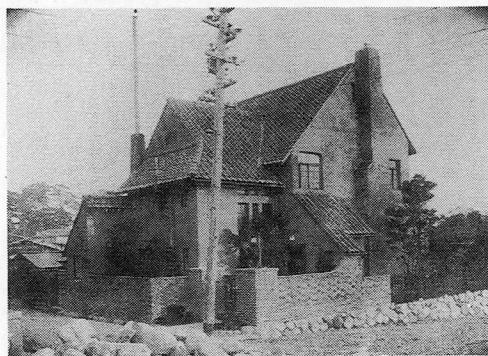
木水邸を目にした時、このような建築意匠の特色にまず目が向くのであるが、そのプランニングに注目すると生活に即した実用的な配慮が尽くされていることに気付く。実際小川は設計趣旨として次の6点を記しており、住生活を直視する真摯な姿勢で住宅計画を追求していたことが分かる。ここに意匠家と目される一方で住宅建築家としての設計思想が明らかにされ、生



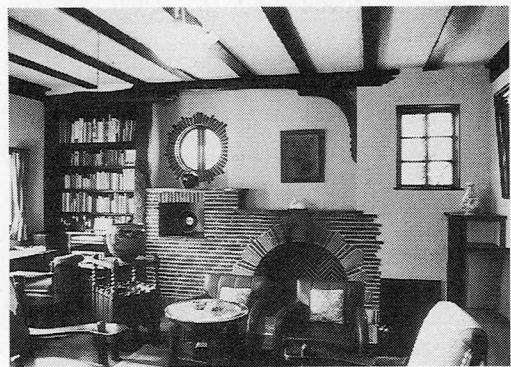
3 川田順邸居間兼応接室 大正12年



4 2階ホール



5 木水栄太郎邸 大正15年



6 居間

活の実態、生活様式に沿った柔軟な設計手法を特色とする小川の姿勢が窺える。

1. 住宅は装飾的の者でなく實用で住心地宜しきものでなくてはならぬ事。
2. 便利で使ひ易きものでなくてはならぬ事。
3. 経済的でなくてはならぬ事。
4. 窮屈でなく少々は傷を付けても分からぬ様且つ惜しくない様蕃カラに仕上げる様に注意する事。
5. 衛生的であらねばならぬ事は勿論である。
6. 四季を通じて耐熱耐寒し用意を充分考慮する事。

つまり、要約すると實用性、機能性、經濟性、住環境と設備という住宅計画の一般的原則に意を向けていたのである。改めて先の川田邸と木水邸の両者の計画的特色を見ると、以下の共通点のあることが分かる。

1. 玄関ホール中心型——ホールを中心に各室への動線が整理されている。
2. 主室として居間兼書斎兼応接室を有する。
3. 椅子式の洋室を主とするが、和室を必要に応じて設ける。
4. 各室を加算式に配置した如く、平面形に凹凸が多い。その結果、屋根の構成は切妻形式を主にして複雑に懸かる。
5. テラス及び玄関ポーチを広くとり、居室にゆとりを与える。

これらの特色は後年の、自邸（1933）を含めて昭和初期の住宅作品にも割合共通してみられるもので、小川が追求していった住宅設計の計画的手法と考えられるものである。

雑木の家

小川安一郎自邸（昭和8年）の建築を再び見直してみたい。

本稿冒頭で触れたように24年間の住友宮繕時代に区切りをつけ、内外木材工芸社という新し

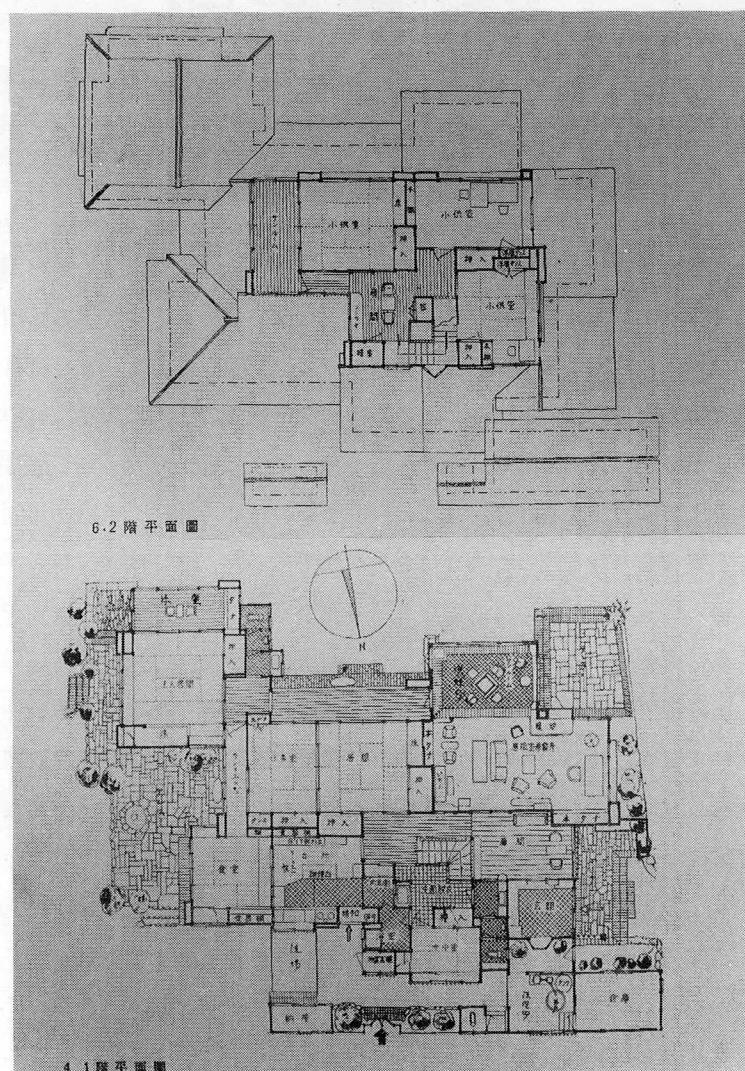
い職場に転じて間もない時期に恰好の土地を得て自邸を建てた。その住宅は「我が住む家に就て」と題し数葉の写真と間取り図をもって発表¹⁰⁾され、次のように短く説明が加えられている。

「……幸ひ只今勤める會社が木材に関する仕事をするので會社の不用材に雜木より使用出来るものを選び出来る丈安價に仕上げる心算で夫々適當な場所に使用して出来上つたものである。設計の本旨としては前申した通り材料を選ばず通風と光線に注意し堅牢に明朗に經濟的を『モットー』とした。……」

その結果、木材は雜木、外壁は北海松の一部に樹皮の残る背板を下見板、テラスには残材のレンガやタイルが巧みに使われ自邸の建築は自然味の濃いものとなった。

1階70坪、2階25坪余りをもつ住宅プランをみると、玄関ホールを中心として各室が鎖状につながる配置をとり、洋間の応接室兼書斎が注目すべき空間である。一方、東側のゾーンには畳敷の和室による日常のスペースをとっている。

つまり、前節で指摘した小川が従来より活用してきた住宅計画手法をより活達に用いたもので、一般に言われる様式性、形式には嵌らない自由なプランをとるものといえよう。この住宅の特質とした自然味を失わないために多くの木材は鋸引きの上、ペンキ拭取り仕上げとされ、洋間の壁面もコルク粒入りのプラスターの上、淡い土色ペンキ塗りという素



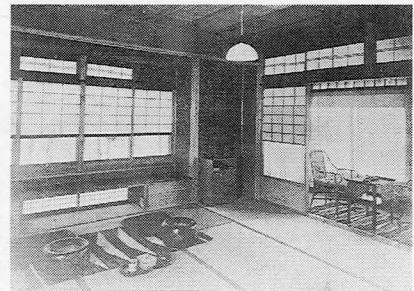
7 小川邸 1, 2階平面図



8 居間兼応接室



9 小川邸西正面



10 主人居間（仕事室）

朴で滋味ある仕上げが用いられている。しかしそこに尋常でない格調の高さ、趣味の深さを窺わせるものがあるのは、ひとえに設計者にしてこの家の主である小川安一郎の卓抜な技量と美的な世界に広がる教養の深さの賜なのであろう。「長山居」と呼ばれたこの住宅には多くの建築家が小川を訪ねて、広間、あるいは居間の縁先で盛んに談論風発の時がもたれたという。この住処はその後、嫡男の正氏そして令孫へと受け継がれ今も変らず往時の様子を留めている。

小川の個人的な設計作品はこの自邸建築の時期を間にして約20年間、40棟余りを数える。その主要なものは表記したように過半が住宅であり、他に病院、レストラン、美術館があるが、本稿のテーマとしている住宅をもって建築家小川安一郎が最も個性を表わした建築作品であるように考えている。

その特色は自邸の建築に窺えるように設計に求められる種々の条件、制約の下で自由かつ活達にまとめられた如き自然さにあり、建築設計の指針とされる設計理論、或は独自の造形的表現をもって個性的なものとする類のものではない。小川は作品の発表に際して設計趣旨の説明は常に簡潔にして控え目であったが、その意図を次のように記している。

「住宅と云ふものは住む人の氣分と考へを充分取り入れて設計施工をせなければならぬので、批判的云ひ分で住宅の設計は斯すべきものであるとか之のスタイルにせなければならぬとか、この様な敷地でなければならないと決定的に云ふべきものでない。……」¹⁰⁾

つまり住宅の設計は施主の要望、生活様式に則して各々発想されるものだという。そういう原則をわきまえながら住宅の設計依頼に応えた。小川の住宅作品は先述した計画手法上の共通点

をもちつつ、一方でそれぞれに特有の雰囲気をもっている。その違いは設計者の作風の変化によるものではなく、施主の個性の違いに帰結する多様性であったように思う。

奇想の館

住宅建築において多くの作品にスパニッシュスタイルが用いられている。込み入った平面形をもつ住宅では種々の様式デザインのなかでもスパニッシュが最も活用し易いということもあるが、当時我国において洋風住宅といえば広くスパニッシュが好まれていたという背景があり、他ならぬ小川安一郎がそのスパニッシュの名手をもって自認していた節がある。その腕を存分に発揮したであろう強い個性をもつ二つの住宅作品がある。住宅に自らの美的趣味の世界を求めた施主に応じて、スパニッシュを基調とした密度の高い装飾的空间を内に秘めた建築である。

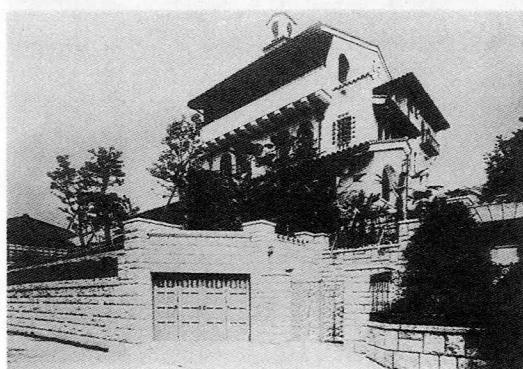
紅塵荘¹¹⁾

南蛮美術品のコレクターで知られた池長孟の自邸であり、蒐集品を飾るサロンとして昭和2年（1927）に建てられたものである。

新神戸駅の東、野崎通りに位置する敷地は六甲山の麓へとつづく段丘状の傾斜地にあり、鉄筋コンクリート造3階建て、延210坪余りの建物は城郭のごとく聳えている。その力感に満ちた構えは玄関に達するために築かれた石積みの屈曲する階段によって劇的な効果をあげている。玄関ポーチの前に立つと複雑に立ち上がる壁、飾り窓、木の化粧梁、鈍く光るタイル壁などスパニッシュの様々な装飾的モチーフとディテールが目に入る。実際この住宅は装飾性の豊溢する装置によって特色づけられるもので、室内では1階がインド風、2階ホールは中国風、食堂は英國風、居間はアラビア風を思わせるインテリアが凝らされていた。その意匠は必ずしも様式的な規範に準じたものではなく、設計者の創意に満ちた表現、さらには不可解な演出性が凝らされている。

この空間に南蛮美術の数々、古陶磁器、仏像さらに欧州の様式家具が配され、往時においては友人知人を迎えて集い、会食の後には3階のボウルルームにてダンスパーティーに興じる日々がつづいたという。

紅塵荘は美術品の蒐集に生涯をかけた施主の夢の館として着想されたもので、住宅作品としては異色のものであるが、設計者小川の様式意匠の表現力、奔放なまでの独創性を垣間見させる建築であった。



II 池長 孟邸 昭和2年

尚、池長孟は昭和12年にコレクションの保存と公開を図るため、再び小川の設計によって美術館を建てている。翌年南蛮美術館として開館された鉄筋コンクリート3階建ての建築は表現派的モダンデザインをとるもので後年の建築デザインの展開として注目されるものである。

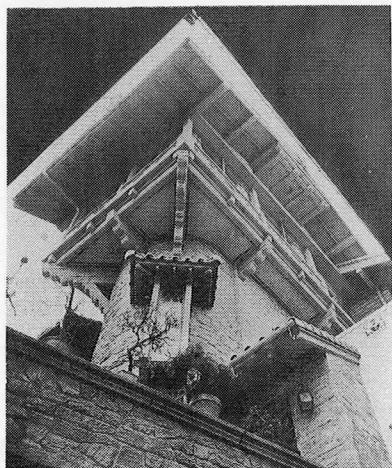
澄翠閣

芦屋六麓荘に営まれていた平野一斎邸の別棟として大林組住宅部（担当小川）の設計施工にて昭和14年（1939）に建てられたものである。

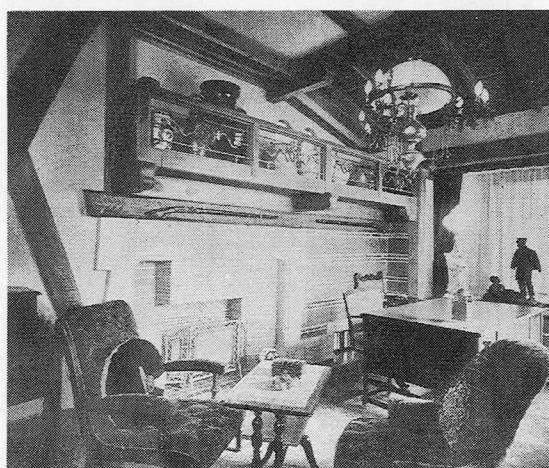
剣谷の山辺に位置する高台にあり、海にまで広がる景色を眺めるために設けられた一種の望楼で、和風主屋の二階より澄翠閣の地階ホールに至る渡廊下でつながっている。建物は木造を兼用する鉄筋コンクリート造で地階を有す2階建てとされるが、実質は3階建て。地階にはホール及び食堂、1階に応接室、書斎、2階に展望室を配して延坪78坪の規模をもつ。下より見上げる外観は半円形状に突出した乱石張りの外壁上に3階部が大きく張り出すなどアーチitectonicな構えを見せている。実際、黒色のスペイン瓦屋根、特有の割型もって跳ね出した腕木、青石乱張り或いはリソイド塗りとした外壁の表現など、全体として洋風或は和風といった様式の規定を拒む異風の建築である。その個性的な表現は室内意匠にも及び、オーソドックスな均整感、スケール感覚に納まらない異種の美的世界が追求されたもののように思われる。

本邸の見学記¹²⁾があり、なかで「平野邸のこと」を記した小林清はその意匠について次のように述べている。

「大きくかぶさつた屋根、その下にあたる展望室が又下のまるみのついた階段室から大きく抜け出してゐるので、真東側からみると、少々不安定に感じるが、近くによって見上げるか、或は阪急電車から見上げた遠望はさう目障りでない。洗練された手法で細部の細かい仕上げに到るまで、緻密な考慮が廻らされてゐる。



12 澄翠閣 外観見上げ



13 1階書斎

次は室内仕上げであるが、たとひ一度簡単な材料であつても、その使ひ途、仕上げの仕方など、入念に考へられて可成り効果的に使はれてゐる、結局室内意匠と云ふものは（外觀の仕上げもさうであらうが）豊富なる経験を経て始めてその一つ一つを完全に生かす事が出来るのでなからうか。……小川氏の諸材料に對する認識が深く扱ひ方の巧みなるにいつも敬服している。」

つまり、尋常でない異色の建築であるが、俗なる新奇さに堕っていないところに小川の手練た設計力を認めているのである。

特命工事

先述したように大正後半期より昭和初期にかけ、小川の個人的な設計による主なる建築は40件余りを数えるが、その過半の建築工事が藤木工務店によって施工されている。その配景には単なる建築工事にかかわる設計者、施工者の関係を越えた信頼関係があった。大正9年（1920）創業された藤木工務店の母体となったのは、住友本店臨時建築部工務課長を務めていた山本鑑之進¹³⁾が独立し明治44年（1911）に起業された山本鑑之進工務店である。山本は建築技術者養成のため明治21年（1888）に設立された築地工手学校の第一期生となり、卒業後、日銀建築部の技手を経て、明治35年に住友入りしている。住友営繕には山本と前後して工手学校卒の後輩が続々と入り、工務部門集団を形成してゆくのであり、山本は野口孫市、日高胖の信頼を得てやがて工務課長に就き活躍していた。その住友営繕時代、5年後輩に入社した小川安一郎と意気投合し、朋友の仲となったという。それには東京帝大卒の多い幹部技師の間にあって、腕に誇りをもつ工手学校出の技師と、多少ユニークな経歴をもって入社した小川が親しさを感じるものがあったのであろう。山本は明治44年に設計課長の日高胖らの推挽を得て、建築請負業の確立を志して独立した。こうした経緯から山本鑑之進工務店は本拠を大阪におき、住友関連の建築工事を主とする有力な建築会社として知られていく。

その山本鑑之進工務店へ大正4年（1915）に藤木正一が入社することになるが藤木は遡って小川安一郎と知己を得ていたのである。

明治43年（1910）県立徳島工業学校建築科を首席で卒業し、日露戦争後の不況のさなかに職場を求めて大阪に向う藤木正一は建築科科長の高北良一教諭から今後に頼るべき建築界の先達として小川安一郎と大林組の松本兎象の紹介を得たという¹⁴⁾。高北良一教諭は、先任校が佐賀工業学校で小川は当時の教え子であったのである。

藤木は来阪後直ちに住友本店へ小川を訪ね、就職先への紹介を請うた。

「……応接室でしばらく待っていると小川氏が、年をとった人と一緒に入ってこられた。その人が山本鑑之進先生であった。山本先生は、『今度、天王寺の第5回国勧業博覧会跡の

敷地に、東京の浅草に匹敵するような歓楽街ができることになった。それは大阪土地建物会社という資本金300万円の会社ができる、その会社がやるのだが、その技師長が僕の友人で、設楽貞雄という神戸に事務所を持っている男だ。』¹⁵⁾

この面談により藤木は設楽の営む神戸建築工務所に一時期勤務することになり、さらに多少の屈折を経て山本鑑之進工務店に入る。

大正9年（1920）に至り健康を損ねた山本は愛弟子の藤木に全てを託して引退し、山本鑑之進工務店の事業を継いで藤木工務店が独立した。

つまり、小川は住友営繕時代より誼みを交してきた山本鑑之進との関係において、さらに小川の師、高北良一教諭の教導を受けて建築界入りし、子弟のように親う藤木正一との奇縁があった。

小川は設立もない藤木工務店に個人的な設計の最初のものと思われる高島屋店員合宿所の工事を創業の記念のように発注している。山本の後継者を自認する藤木はその後も住友営繕に関わる建築を広く担当し、優れた邸宅住宅を多く残し名声を高めていった。そうした住宅設計作品を生み出していくのがほかでもない小川安一郎であり、後輩の長谷部銳吉、 笹川慎一らであった。

美術工芸的住宅

小川が住友入りした10年後、つまり大正6年に住友営繕に入り、多くの住宅建築を残した 笹川慎一（明治22年～昭和12年）について関心をもち、筆者は数年前に拙稿「建築家 笹川慎一をめぐって」¹⁶⁾を記している。本稿はそれと対をなすものとして起筆した小稿である。

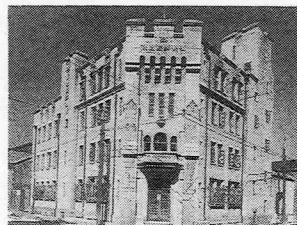
生年において7年の開きのある小川と 笹川であるが、住友営繕の建築技師としての在職期間の多くを共にし、共に意匠に秀でた技師として組織内で認められた一方で、サイドワークとしての住宅設計に秀作を多く残した両者は、各々個性をもちつつ互いに共鳴するところをもっていたように思う。

両者の出会いは、大正4年（1915）東京での住友銀行東京支店新築工事の設計現場において始まったはずである。その年に早稲田大学建築科を卒業した 笹川は、その現場雇いの嘱託技師として住友入りしている。東京支店の工事を終えた大正6年、両者は帰阪し本店営繕課にて机を並べたのである。

ここでは 笹川について記すことは控えるが、小川の美的世界を育んでいたスペニッシュの建築、水彩画の世界は 笹川にも及んでいたものであり、 笹川が先導した東洋の美術古陶磁のそれは小川にも通じていたのである。則ち美的趣味、 素養を互いに切磋琢磨して高め分ち合っていたように思われる。両者は本務において、屢々共同して意匠設計にあたっていたのであり、両

者の残した個人的な住宅作品のいくつかには共通する表現が見られるのである。具体的に記すと、洋家具、ステンドガラス、装飾金物など美術工芸的設備であり、それを制作、施工した職人工房的な集団が両者を含めた建築技師の周辺に在った。この工房的な専門職種の実態は未だ明らかにするには至っていないが、彼らによってはじめて見た小川邸の広間のような美的趣味に溢れた室内意匠がつくられたのであり、その意味で小川らの設計による住宅を美術工芸的住宅と呼べるよう思う。

小川安一郎 建築作品 《履歴書に記された設計作品の主なるもの》



14 大阪扁桃腺病院



15 寺井栄一邸



16 今村幸男邸

1	川田順邸	1923(大正12)	岡本工務店	神戸市御影町
2	飯田直次郎邸	1925(大正14)	(藤木工務店)	芦屋平田町
3	木水栄太郎邸	1926(大正15)	藤木工務店	神戸市御影町
4	大阪扁桃腺病院	1926(大正15) (濱地藤太郎)	藤木工務店	大阪市中央区
5	多田 豊邸	(大正末期)		大阪市住吉区
6	池長 孟邸 (紅塵荘)	1927(昭和2)	藤木工務店	神戸市中央区
7	野田屋会館 レストラン (野田三郎)	(昭和初期)		大阪市中央区
8	鳥井信治郎邸	(昭和初期)		宝塚市雲雀丘
9	肥田増雄邸	(昭和初期)	(藤木工務店)	大阪市天王寺区
10	寺井栄一邸	1930(昭和5)	藤木工務店	芦屋市船戸
11	今村幸男邸	1931(昭和6) (泉光荘)	藤木工務店	西宮市南郷町
12	小川安一郎自邸	1933(昭和8)	藤木工務店	豊中市上野西
13	萬城目(まぎめ)	1934(昭和9) 耳鼻咽喉科病院及び住宅	藤木工務店	大阪天王寺区
14	日本メソヂス ト芦屋教会	1935(昭和10)	藤木工務店	芦屋市舟戸
15	藤井邸 (松風山荘)	1936(昭和11)	大林組	芦屋市
16	杉山邸洋館	1936(昭和11)	笠谷工務店 内外木材工芸	芦屋市
17	山内卯之助邸	1936(昭和11)頃		芦屋市
18	肥田昌三邸	1937(昭和12)	藤木工務店	芦屋市
19	池長 孟氏美術館	1937(昭和12) (南蛮美術館)及び住宅	藤木工務店	神戸市
20	石田信夫邸洋館	1938(昭和13)頃	大林組	大阪市天王寺区
21	平野一斎邸洋館	1939(昭和14)	大林組	芦屋市六麓荘 (澄翠閣)

おわりに

数年前笛川慎一と取り組んでいた一方で、小川の仕事について少なからず気になるものがあった。小川安一郎に関しては、誰よりもご長男である正氏に尋ねたかったが、ご療養中にて叶わず、資料集めを心掛けたが余りはかどらなかった。

それをなんとか小稿に草したのは、ご次男弘二氏、ご次女栄子氏、ご令孫の純氏の協力と支援によるもので、ここに厚く御礼申し上げます。一方、小川の業績について種々ご教示賜った樋口治先生、坂本勝比古先生、藤木工務店の山本秀雄氏に改めて御礼申し上げます。また資料の提供などお世話になった方は多く以下に記して謝意を表します。住友史料館神田郁夫、竹中工務店狩野忠正、里村年人、奥宮守、坂本仙吉、劉燦太郎、山本徹男、三木ちえ子、の諸氏。

注記

- 1) 『建築と社会』日本建築協会、第18輯-5、昭和10年5月。PP. 31~35
- 2) 坂本勝比古『日本の建築・明治大正昭和—商都のデザイン』三省堂、昭和55年9月。PP. 118~140
- 3) 小川正氏蔵
- 4) 住友入りした明治40年頃より安一郎をなのる
- 5) 『建築と社会』日本建築協会、第13輯-5、昭和5年5月。PP. 23~30
- 6) 『建築と社会』日本建築協会、第18輯-8、昭和10年8月。PP. 23~33
- 7) 樋口治（元京都工芸繊維大学教授）、奥宮守（元内外木材工芸社）の談による
- 8) 『藤木工務店70年史』平成4年3月。P. 223
- 9) 「川田順氏の『御影』邸」『建築と社会』第6輯-12、大正12年12月。絵頁、PP. 25~30
「友人木水君の住宅の設計に就いて」『建築と社会』第8輯-2、大正14年2月。絵頁、PP. 63~64
- 10) 1) と同じ
- 11) 現在劉外科病院。劉燦太郎「奇想に満ちた南蛮の館」『日本経済新聞』1991年11月5日
- 12) 「平野邸澄翠閣見學記」『建築と社会』第22輯-7、昭和14年7月。絵頁、PP. 51~58
- 13) 山本秀雄『源流をたずねて』藤木工務店、平成2年5月。PP. 27~50
- 14) 『藤木工務店70年史』平成4年3月。PP. 215~216
- 15) 『藤木工務店70年史』平成4年3月。P. 218
- 16) 『藝術』15 大阪芸術大学紀要 1992年10月。PP. 23~38

図版出典

1. 『建築と社会』日本建築協会、昭和5年5月。 2. 11. 14. 15. 16. 『藤木工務店70年史』平成4年3月。 3. 4. 『建築と社会』大正12年12月。 5. 『建築と社会』大正14年2月。 6. 山本徹男氏蔵。 7. 『建築と社会』昭和10年5月。 8. 9. 10. 小川純氏蔵。 12. 13. 『建築と社会』昭和14年7月。